



Title	叙述文脈と連語文脈における概念拡張分布の相関について
Author(s)	岡田, 禎之
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2017, 51, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71411
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

叙述文脈と連語文脈における 概念拡張分布の相関について

岡田 禎之

キーワード：項・付加詞／主要部・修飾部／コーパス調査／メトニミー／メタファー

1. はじめに

拙論（2016a,b, in press）などにおいて筆者は、名詞の語彙概念拡張に、その使用環境における解釈の非対称性が認められることを、主に身体部位名詞を取り上げて調査することで検証してきた。特に、述語の項要素として用いられる場合と、付加詞要素として用いられる場合に、前者の環境における拡張タイプが、後者の環境における拡張タイプを部分集合として含む形になっていること（叙述文脈における概念拡張の非対称性）、同様に、連語として利用される場合に、主要部（右側要素）位置に用いられる名詞が占める概念拡張のタイプが、修飾部（左側要素）位置で用いられる名詞が占める概念拡張タイプを部分集合として含むこと（連語文脈における概念拡張の非対称性）、という2つの環境における非対称性が観察された。この分布傾向は、叙述文脈と連語文脈のいずれの環境においても、中心的参与者として機能する名詞要素が、周辺的要素として機能する名詞要素の場合よりも、概念拡張の対象として選択されやすい、という統一した傾向を見せている。もちろんこの一般化に対しては、一見したところ例外がないわけではないが、しかしそれらも歴史的な発展経過を考察することで例外と見なす必要がなくなった。動詞由来の複合語において、左側要素として動詞の補部要素が登場する場合に限られた例外であるために、述語の項要素として機能する事例と見なすことができたりして、結局のところ例外と考える必要がないことが判明し

た（詳細については、拙論2016a, in pressに述べたことであるため、ここでは割愛する）。

本稿では、これらの事実関係に関する具体的検証の部分は省略し、この2つの環境における概念拡張分布からどのような観察が行えるのかについて検討していきたい。以下、2節では、これら2つの環境において観察された概念拡張分布の全体像を表形式にして提示する。3節では、その表を叙述文脈における分布を基準とした新たな観点から見直すことで、どのような観察が認められるかを考察する。4節では、述語の項、付加詞、連語の主要部位置、連語の修飾部位置という4つの言語環境が語彙概念拡張にとってどのような使用環境であるかを提示し、概念拡張のタイプ分類のあり方とどのように関わるかを考察する。5節を全体のまとめとする。

2. 身体部位名詞の概念拡張分布

16個の身体部位名詞（back, brain, brow, ear, eye, face, finger, foot, hair, hand, head, heel, mouth, nose, shoulder, waist）に関して、British National Corpus (BNC) からデータをランダムに抽出し、項位置での用例250、付加詞位置での用例250を集め、概念拡張事例を取りだして分布状況を確認したのが、叙述文脈での調査である（ただし、250事例に満たない場合に関しては、実数で分析を行った）。これに対して、OED ver. 4.0、『英辞郎 on the web（2016年3月時点）』、『研究社新英和大辞典』第六版、『Progressive 英語逆引き辞典』、『逆引英語名詞複合語辞典』で同じ16個の英語身体部位名詞に関して、当該の名詞が2語で形成される連語内でhead要素として機能している場合とmodifier要素として機能している場合を区別して、意味分類を行ったのが、連語文脈での調査である。（『英辞郎 on the web』のデータに関しては、当該名詞で検索し、その名詞が最初に現れる2語の連語表現（modifier用例）と、当該名詞が2番目の要素として現れる2語で構成された連語表現（head用例）を取りだして検討した。）以下が調査内容をまとめた一覧表である。

表 1 叙述文脈と連語文脈における分布表

Word	sense	argument	adjunct	Head	Modifier
Finger	finger-like object	◎	◎	○	○
Waist	waist-like part	◎	◎	○	○
Ear	sense of hearing	◎	◎	○	○
	listener	◎	○ non-West-Indian		
Hair	hair style	◎	◎	○	○
	hair-like part	◎	(○ cross)	○	○
Brain	intellect	◎	○ first-class	○	○
	consciousness/sense	◎	◎	○	○
	person	◎	○ business	○	○
Shoulder	shoulder-like part	◎	◎	○	○
	shoulder injury	◎			
	person	○ fatherly			
Back	back part	◎	◎	○	○
	backward space	◎	◎	○	○
	temporal pastness	(○ play)	(○ flash)	○	○
	reverse direction	(○ splash)	(○ splash)	○	○
Brow	top/edge	◎	◎	○	○
	intelligence	○ middle	○ middle	○	○
	complexion	◎	○ fierce, angry	○	
	person	○ sulky			
Foot	measuring unit	◎	◎	○	○
	base/bottom	◎	◎	○	○
	soldier	◎	○ 45th	○	○
	rhyme unit	(◎)	(○ rhythmic)	○	
Mouth	opening	◎	◎	○	○
	words	◎	◎	○	○
	person	○ every		○	
	speaker	(○ loud)	(○ big)	○	
Heel	shoe/sock	◎	◎	○	○
	bottom part	◎	◎		
	villain	◎			
	kicking in a scrum	◎			
	person			○	
Nose	top/front	◎	◎	○	○
	smell	◎	○ fruity, lemony	○	○
	instinct/sense of smell	◎	◎	○	○
	interest	○ collective			
	person			○	○

Face	surface/front	◎	◎	○	○
	complexion	◎	◎	○	○
	prestige/honor	◎	(○ public)	○	○
	external appearance	◎			
	person	◎	○ new	○	
	type face	(○ bold)	(○ bold)	○	
Head	leader	◎	◎	○	○
	top/front	◎	◎	○	○
	mind	◎	◎	○	○
	person	○ good	◎	○	○
	head-like object	◎	(○ flower)	○	○
	knowledge/intelligence	◎	(○ good)	○	○
	addict	(○ acid, pot)	(○ acid)	○	○
Eye	eye-like object	◎	◎	○	○
	vision/sight	◎	◎	○	○
	observer/vigilance	◎	○ watchful	○	○
	perspective	◎	◎	○	
	disposition in the eye	○ evil, glittering	○ covetous	○	
	line of sight	◎		○	○
	attention	◎	◎		○
	aim/interest	◎	◎		
	region	○ black	○ black	○	
Hand	person/worker	◎	○ helping	○	○
	control	◎	○ physician's	○	○
	assistance	◎		○	○
	skill/labor	◎		○	○
	writing	◎	○ flowing	○	
	player's cards	○ good	○ anti-Protestant	○	
	side	(○ right)	○ one, other	○	
	hand-like object	(○ hour)	(○ hour)	○	○
	clapping	(○ big)	(○ big)	○	
	TOTAL	----	58 (◎49 ○9)	44 (◎28 ○16)	58
+ extra	----	67 (◎50 ○17)	56 (◎28 ○28)	---	---

左端の列は、この調査で取り上げた16個の身体部位名詞表現であり、その右隣が観察された拡張義、3列と4列はそれぞれの拡張義がそれぞれ項位置、付加詞位置で確認できたかを示す。◎は確認できたことを示し、空欄は確認できなかったことを示している。

この3列、4列には、二重丸、一重丸、丸括弧表記などがあるが、二重丸は、当該の身体部位名詞に、最低限必要となる決定詞（所有代名詞、冠詞、指示詞など）以外の前位修飾要素が付随しない形で、拡張義が観察される事例が少なくとも一つは存在している、と示している。この研究では、身体部位名詞の単数形のみを取り上げて調査を行っている（というのも、連語文脈においては、修飾要素位置では名詞の単数形が用いられるのみで、複数形は排除される（eye contact vs. *eyes contact）ため、比較対象となるデータの均質性を保つための方策としてこのような制限を課した）。すると、普通可算名詞である身体部位名詞は、単数形で生起する場合、必ず何らかの決定詞を伴わなければならないという生起条件が付くことになるが、この条件を満たすための最低必要要素のみで生起した場合でも、概念拡張解釈が可能となることを二重丸は表している。例は、以下の(1)、(2)において、太字で斜字体となっているものである。(1)、(2)は身体部位名詞eyeがそれぞれargument/adjunct位置で用いられた場合の拡張解釈の具体事例を提示したものであり、丸括弧内に、BNCのファイル番号とどの拡張解釈の事例であるかを記載している。

(1) EYE (Expanded references in argument positions)

- a. Some people at the church door caught his **eye**... (A0N) (attention)
- b. I cast my **eye** over the front page of the Telegraph... (A0R) (line of sight)
- c. No interesting touch or invention of form escaped his **eye**. (A04) (sight/vision)
- d. Many skills such as ploughing ... or developing an **eye** for livestock may take years to obtain... (ARS) (perspective)
- e. The proposals also have a safeguard in takeovers, where a predator often has his **eye** on a rich pension scheme. (A85) (aim/interest)
- f. ...a bad weather cyclone has a center of low pressure that suck air at ground level in an anticlockwise spiral, to form its **eye** into a right handed

helix. (ADX) (eye-like object)

- g. It was a kind intelligent eye too... (ABL) (disposition expressed in the eye)
- h. The quickness of the hand deceiving the *eye* and all that. (A0D) (observer/vigilance)
- i. For his pains he received a black eye, ... (ACW) (region around the eye)

(2) EYE (Expanded references in adjunct positions)

- a. With a sharp ear for dialogue and an *eye* for the engagingly surreal, ... (AHA) (perspective)
- b. ... the finished product is a smooth curve which resembles what we might have drawn if we had smoothed the raw data by *eye*; ... (B16) (sight/vision)
- c. They partly justified this [parents' duty of choosing how many children they have] by an *eye* upon the too rapid growth of population in some countries. (A68) (attention)
- d. Like most shows which are manufactured with an *eye* to commercial success, ..., this one will probably fail. (A5E) (aim/interest)
- e. The swing of the hurricane was bringing them back into the *eye* of the storm. (AMU) (eye-like object)
- f. Meanwhile, the British Expeditionary Force (BEF) had been safely ferried to France under the watchful eye of the British Navy. (CLX) (observer/vigilance)
- g. ... Thomas Cook watched the great North American continent, which was then virgin territory untrampled by the feet of British tourists, with a covetous eye. (ASJ) (disposition in the eye)
- h. ... I force him to put the Hoover round on pain of a black eye. (AC3) (region around the eye)

次に一重丸は、データサンプル内には、最低限必要となる決定詞に加えて、何らかの前位修飾要素が付随した事例しか存在しなかったことを表している。(1)、(2)の例の中では、下線を引いたものがその具体事例に当たる。これらの意味は、当該の拡張義に至るために付加的な修飾要素を必要としているタイプであると考えられる。例えば、(1g)の「感情や性格」を表すeyeの用法に関して、OEDは次のように記載している。“with adjectives, expressing the disposition or feeling of the person looking (as angry, contemptuous, friendly, jealous, loving, wondering).” 実際このデータベース内の用例に関しても、すべて限定修飾表現が付随していた。表の中で、一重丸の後ろに記載された形容詞類は、使用されていた前位修飾要素の例である。

最後に丸括弧内に記載されている一重丸や二重丸であるが、これらは500事例のデータサンプル内には用例が発見できなかったものの、検索範囲を広げて追加調査を行うことによって事例が発見できたものである。この追加データを加えてみても、すべての身体部位名詞に関して、項位置と付加詞位置における拡張解釈事例の非対称分布は保持される。

表の5列、6列目は連語文脈における、主要部、修飾部要素として機能した場合に、当該の拡張義が観察されるかどうかを調べたものである。叙述文脈においても、連語文脈においても、中心的参与者（項または主要部）として登場する身体部位名詞が、周辺の参与者（付加詞または修飾部）としての身体部位名詞の場合よりも、概念拡張の対象として選択されやすい、という傾向が見て取れることになる。

この5、6列目に関しては一見して分布の反例となるものが一つだけ確認できる。つまり、主要部要素として検出されず、修飾部要素としてのみ検出された事例が一つある。それは、eyeのattentionの意味で用いられる事例である。用例としては、eye-catcher/eye-catching/eye-grabber/eye-grabbingといった動詞派生複合表現がこれに当たる。

これらの用例に特徴的なのは、主要部を構成する名詞（または分詞）が動詞由来のものであり、修飾部にある身体部位表現が、その動詞の補部に対応

しているということである。つまり身体部位表現が項要素として機能している場合の意味関係が、複合語にそのまま持ち込まれているのである (catch-one's-eye, grab-the-eye-of-someone)。このような場合、概念拡張解釈は例外的に主要部位置での用例が認められなくても認可できると思われる。これは動詞派生の複合語形成という、いわば特殊ルートを利用した用例だからである。

3. 叙述文脈を基準とした再分類

叙述文脈と連語文脈での意味分布を、異なる視点から捉え直してみたのが、表2である。これは、叙述文脈における分布特性を基準として、その分布が連語文脈における分布とどのように関連するのかを表している。ここでは、500事例のデータサンプルに加えて、追加データ調査を行った結果も加えて分類をしているが、500事例のデータサンプルに限っても同じ傾向が認められる。(ただ、追加データを加えた方がより明確な傾向が認められるため、本稿ではそのようにしておく。)

表2 叙述文脈を基準とした分布表

	argument	adjunct	number of cases	head OK/head X	modifier OK/modifier X
A	◎	◎	27	24/3	24/3
B	◎	○	16	15/1	11/5
C	◎	---	7	3/4	3/4
D	○	◎	1	1/0	1/0
E	○	○	12	12/0	5/7
F	○	---	4	1/3	0/4
G	---	◎	0	0/0	0/0
H	---	○	0	0/0	0/0
I	---	---	2	2/0	1/1

この表では、当該の拡張解釈が前位修飾語がなくても検出できたか (◎)、追加の修飾語が必要となったか (○)、もしくはまったくデータベース内で検出できなかったか (---)、という変数と、項位置・付加詞位置での生起が認められたか、という変数によって、拡張解釈のタイプ数を分類した。この

2つの変数の組み合わせは、表にある通り、合計9つのグループを作り出すことになる（Category AからCategory I）。数字はそれぞれのカテゴリーに属する拡張解釈のタイプ数であり、右の列では、そのグループに属する拡張解釈が、連語文脈において主要部位置に生じたか、修飾語位置に生じたかを記載している。例えば、Category Aの行は、項位置および付加詞位置で修飾要素が不要なままで利用可能であった拡張解釈は27種類あったことを示し、そのうちの24種類の解釈が、連語文脈の主要部位置および修飾部位置においても検出されたことを表している。そして3つの解釈が、項位置・付加詞位置においてそれぞれ検出できなかったことを示している。他のカテゴリーに関しても同じ形式で表示を行っているが、ここから少なくとも以下のような観察が可能になると考えられる。

(3) 叙述文脈と連語文脈の相関関係

- a. Category Aの意味（付加的な限定形容詞の補助が不要な拡張義）は、連語文脈において主要部要素にも修飾部要素にも用いられる可能性が高い。その利用率は非常に高い（ $24/27 = 89.0\%$ ）。これらの意味は限定形容詞による補助も不要で、項位置に制限されることなく生起位置も自由であるため、語の意味としてかなり慣習化が進んだ意味として確立していると考えられる。そのため、連語レベルでの入力にもなりやすいと考えられる。具体例としてはBROWのtop/edgeの意味、FACEのfront/surfaceの意味、HEADのleaderの意味、NOSEのfront/tipの意味、MOUTHのopening/apertureの意味、BACKのbackward spaceの意味などが挙げられる¹⁾。
- b. 項位置において限定修飾要素の補助を必要としないCategory A、B、Cは、タイプ数も多く、また連語文脈で主要部要素としても修飾部要素としても用いられることが多い（主要部位置での利用率： $42/50 = 84.0\%$ 、修飾部位置での利用率： $38/50 = 76.0\%$ ）。ただし、修飾部位置では利用率はCategory AからBへ、さらにBからCへと

大きく減少していく。この位置で利用するためには、Bに見られるような限定修飾の付加や、Cに見られるような生起位置の制限（項位置にのみ生じる）がないことが理想的なのであり、Category Aがやはり理想的な入力対象になるといえる。（Category Aの修飾部位置での利用率： $24/27 = 88.9\%$ 、Category Bの修飾部位置での利用率： $11/16 = 68.8\%$ 、Category Cの修飾部位置での利用率： $3/7 = 42.9\%$ ）。

- c. Category E、Fの意味は、主要部位置では生じやすいが、修飾部位置では生じにくい。主要部位置での利用率： $13/16 = 80.1\%$ 、修飾部位置での利用率： $5/16 = 30.1\%$ となっている。これらのカテゴリーに属する16の意味はすべて何らかの限定修飾の付加を必要としているものである（すべて一重丸が付いているカテゴリー）。当該の拡張義認定のために限定修飾要素の補助が必要となるような拡張義は、連語文脈の修飾部位置には利用されにくいようである。2語からなる連語の場合、修飾部要素は後続する主要部要素の意味を限定するために機能する要素であり、自身が他者から限定される対象にはなっていない。連語の先頭要素であり、これを限定修飾する要素は他に存在しないからである。したがって、限定修飾要素を必要とするような拡張義を持つ名詞表現は、他の要素を限定修飾する機能を帯びることは困難であると考えられる。制限を加える側の要素として機能するものはその意味を独自に特定できる（他の要素の補助が不要な形で意味特定が可能となる）ことが望ましいと考えられるからである。

(4) 項・付加詞と前位修飾の関連性

- a. 項位置では限定修飾要素の付加が不要で、付加詞位置においてのみ限定修飾要素の付加が必要な拡張義（Category B）は16事例あるのに対して、逆に付加詞位置においては限定修飾要素が不要で、項位置においてのみ限定修飾が必要とされる拡張義（Category D）は1

事例のみである。（“per head”というセットフレーズが唯一の事例であり、ここでは“head”が「人」を表すために用いられている。）このCategory Dはかなり例外的な事例であると考えられる。

- b. 項位置で限定修飾の付加が不要なグループ（Category A, B, C）はタイプ数が50と多いが、付加詞位置で限定修飾の付加が不要なグループ（Category A, D, G）は28であり、しかもそのうちの27までが、慣習化が進んだ拡張義と考えられるCategory Aに属している。付加詞位置で限定修飾の補助を受けない形で拡張義として利用できるのは、基本的にかかなり慣習化の進んだタイプの拡張義に限られると言えそうである。

(4a)、(4b)の事実は、付加詞における拡張義の場合、限定修飾要素の付加が期待されることを示していると考えられる。付加詞は周辺の参与者であることから、その周辺性を限定修飾要素の付加という形で拡張義の解釈を補助することによって、補完しているのではないかと考えられる。

(5) 項・付加詞の比較と主要部・修飾部の比較

- a. Category G, H, Iは項位置では検出できない拡張義のタイプであり2事例しかないが、これに対して付加詞位置で検出できなかった拡張義のタイプ（Category C, F, I）は13事例存在する。付加詞位置で検出できない事例は数が多いのに対して、項位置で検出できない事例は少数であり、この点でも項位置における概念拡張が付加詞位置における拡張と比較して、生産性が高いと言える。
- b. 修飾部において検出された拡張義は、主要部位置において検出された拡張義よりも制限されていると考えられる。AからIまでのどのカテゴリーグループを考えてみても、主要部位置において検出された拡張義の事例数は、修飾部位置において検出された数と同じかそ

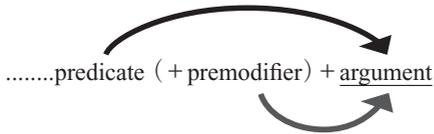
れよりも多くなっており、逆に数が少なくなっているカテゴリーは1つも存在しない。それぞれの身体部位名詞を基準として分類して拡張義分布を考察しても、主要部位置での拡張義が修飾部位置での拡張義を部分集合として含む形になっていたが、視点を変えて、叙述文脈における分布の観点から捉え直してみても、やはり同じく前者が後者を部分集合として含む形になっていることは、主要部位置での拡張義の生産性を物語っていると考えられる。

4. 項・付加詞と主要部・修飾部という生起環境

項、付加詞、主要部、修飾部という4つの出現環境を簡略化して図示すると(6)のようになると考えられる。この図式を利用することでそれぞれの拡張解釈が生じるための鍵となる要素の存在が明示化できると思われる。

(6) a. 項位置：67タイプの拡張義

[central in predication/(central in modification)]



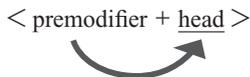
b. 付加詞位置：56タイプの拡張義

[peripheral in predication/(central in modification)]



c. 主要部位置：58タイプの拡張義

[central in modification]



d. 修飾部位置：45タイプの拡張義

[peripheral in modification]

< modifier + head >

叙述的文脈には項・付加詞位置での使用があり、連語的文脈では主要部、修飾部位置での使用がある。最初の項位置(6a)であるが、ここでは述語に選択されることによって与えられる意味的な選択制限があり、また名詞句内でも当該の身体部位表現は主要部として機能することから、限定修飾要素からの追加的な意味制限が与えられ得る。さらに、この位置の名詞要素は文が叙述する出来事の中心的参与者でもあるため、文脈に即した適切な拡張解釈を得るための処理労力を集中的に割くに値する参与者である。意味解釈を得るための選択制限的情報も充分に提供されている環境でもあることから、この位置は新規の拡張解釈を生じるには理想的な環境であると考えられる。

(6b)の付加詞位置は、叙述的文脈という観点からは周延的要素であり、その概念拡張のための選択制限などの意味的情報は期待できない位置であるが、一方で当該名詞句内では主要部位置の要素であることから、この名詞を限定修飾する要素が付加されることは充分ありうる。この環境は、連語的文脈における主要部要素の場合(6c)とほぼ変わらないものであると考えられる。どちらの場合も、名詞句内に話を限れば中心的要素であり、拡張解釈を得るための意味的な制限を受ける側の要素であると言えるので、項位置に次いで拡張解釈を得やすい環境であると考えられる。

最後に残された使用環境は(6d)の修飾部位置であるが、この位置では名詞表現はどこからも意味的な限定を受けることができず、また名詞句内での周延的要素であり(もちろん叙述的文脈で考えたとしても、主要部要素でないことから、述語に選択される要素ではない部分であり、周延的要素でしかありえない)、拡張義を得るための処理労力をかけることが期待できない位置にある。この位置には、述語や限定表現から得られる意味制限が存在しなくてもアクセスすることが可能な、かなり慣習化の進んだ語彙的な拡張義が

期待されることになる。²⁾

先述のように概念拡張の理想的生起環境は項位置であり、そのことを如実に物語る事例がBROWという身体部位名詞の以下のような使用例に認められる。

- (7) a. Argument use: ... she was alone again ... until the next sulky brow slouched into view and stole her hopeful heart away. (AOL)
- b. Argument use: Often has the aching brow of royalty resigned its crown... (FAE)

これらの例文では、まずBROWの限定詞として働いている形容詞 (sulky, aching) が、字句通りの解釈から「表情」という解釈を呼び起こしている。しかしそれだけではなく、この名詞表現は文主語として機能しており、述部には意図的な動作を表す動詞が登場している (slouch, steal, resign)。ここに至って、BROWは「表情」ではなく、「その表情を持った人物」を表すところにまで拡大されてきている。このように「人物」を指すために利用されるBROWは非常に珍しいものであり、BNCコーパス全体を見ても、上記の2例しか検出できなかった。そしてこの意味は、項位置においてのみ認められており、今のところ付加詞位置での用例もなく、連語的文脈での用例も記録されていない (主要部要素としても修飾部要素としても、記載がない)。また筆者が調査した限りにおいて、いずれの辞書にもBROWが「ある表情を持った人物」を指すという解釈は掲載されていなかった。

このような用法が今後さらに発展していくのか、それとも忘れ去られていくのかは不明である。それぞれの名詞表現が、それぞれ独自の語彙概念拡張の歴史を持ち、変化していくのであり、一般化を行うことはとても危険であり、また困難であると考えられる。しかしながら、概念拡張には生産的なルートと生産的でないルートがあると考えられ、また生産的ルートとなるにはそ

れなりの理由があるものと考えられる。

結論として、身体部位名詞の叙述的文脈・連語的文脈における使用事例から、語彙概念拡張分布に関して以下のようなことが言えそうである。

- (8) a. 叙述的文脈で、項位置において検出される拡張義は必ずしも付加詞位置において検出されるとは限らないが、付加詞位置において検出される拡張義は項位置においても検出されうる。つまり、付加詞位置においてのみ可能となる拡張義は存在しない、ということになる。
- b. これと並行的に、連語的文脈においては主要部名詞要素が、修飾部名詞要素に比べてより広い拡張義のバリエーションを示す。(例外的事例もあるが、主要部と修飾部の要素が、述語とその補部の関係にある動詞由来の複合語に限られており、項位置の要素に相当すると考えることが可能な事例のみであった。)
- c. 上記の2点から、拡張義の解釈は、項から付加詞へ、主要部から修飾部へと浸透していくという方向性が認められ、これは主要参与者から周辺の参与者への意味拡張の浸透として取りまとめることが可能である。

(8c)に関して補足しておく、ある環境において生起可能な解釈のうちの一部が別の環境においても認められるのであれば、前者の環境が基本的生起環境であり、後者は副次的、特殊的、あるいは後発的な生起環境であると考えられるはずであり、本稿の事例に当てはめて考えた場合には、語彙概念拡張は基本的に主要な参与者の位置において始まり、そこから周辺の参与者の位置へと拡散していくと考えるのが妥当である、ということを示したものである。

ここで扱った2つの生起環境は並行的であり、ある意味、主要部・修飾部で構成される連語的文脈は、項・付加詞で構成される叙述的文脈のミニチュ

ア版であると考えることができそうである。

5. まとめ

本稿では、身体部位表現の概念拡張の分布を2つの生起環境において比較検討し、そこに連続性を認め、またそれぞれの生起環境における分布の非対称性が並行的であることを観察した。叙文的文脈においても、連語的文脈においても、中心的参与者として機能する身体部位名詞において拡張解釈は生産的に認められ、周期的参与者にはその部分集合的な拡張解釈が認められるのみである。このような分布特性から導かれる一つの仮説として、「主要参与者から周期的参与者への意味拡張の浸透」という方向性が妥当なものと考えられる。

[注]

- 1) 糊山 (2002) によると、語義の基本性の一つの判断基準として、その語義が修飾表現を伴わずに生じることができるかどうか、というものが考えられる。

(i) ここにものを置かないでください。

(ii) 私のようなものが出席してよろしいでしょうか。

(iii) *ものが出席してよろしいでしょうか。 (糊山 2002 : 107)

「もの」は事物を表す場合と人間を表す場合があるが、この表現の基本義は事物であると考えられる。前者は修飾表現を伴わずに出現できる (i) のに対して、後者の解釈は (ii) と (iii) の対比からも明らかなように、修飾表現が付随しないと生じない。

Category A の意味は、これと平行する形で、修飾表現を伴わずに生じることができる (しかも出現位置の制限もなく、項・付加詞のどちらの位置にも自由に生起できる) ことから、十分に慣習化が進み、語義として安定したものになっていると考えられる。

- 2) 後置修飾という修飾関係は、ここでは扱わないこととする。後置修飾要素は、様々な形態で現れる (前置詞句、形容詞句、分詞句、関係節など) ものであり、前位修飾要素に比べて遙かに複雑で雑多なカテゴリーを形成する。また、後置修飾部は句を形成することから、連語的環境における修飾部要素としては

不適切である (*an afraid-of-dogs man vs. a man afraid of dogs, *a pleased-with-the-result man vs. a man pleased with the result)。したがって、叙述的文脈と連語的文脈における出現状況を比較する検証対象として利用することができない。このタイプの修飾表現に関する調査は別の機会に行いたい。

[参考文献]

- Arcodia, Giorgio. 2011. A construction morphology account of derivation in Mandarin Chinese. *Morphology* 21: 89-130.
- Barnden, John. 2010. Metaphor and metonymy: Making their connections more slippery. *Cognitive Linguistics* 21: 1-34.
- Evans, Vyvyan. 2010. Figurative language understanding in LCCM theory. *Cognitive Linguistics* 21: 601-662.
- García-Miguel, José 2007. Clause structure and transitivity. In Dirk Geeraerts and Hubert Cuyckens (eds.) *The Oxford handbook of cognitive linguistics*, 753-781. Oxford: Oxford University Press.
- Handl, Sandra. 2011. *The conventionality of figurative language*. Tübingen: Narr Verlag.
- Herbst, Thomas, David Heath, Ian F. Roe, and Dieter Götz. 2004. *A valency dictionary of English*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Hilpert, Martin. 2006 Keeping an eye on the data: Metonymies and their patterns. In Anatole Stefanowitsch and Stefan Gries (eds.). *Corpus-based approaches to metaphor and metonymy*, 123-151. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 粕山洋介 2002. 『認知意味論のしくみ』東京：研究社.
- 岡田禎之 2016a. 「日英語名詞表現の語彙概念拡張と項・付加詞の非対称性」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第 56 号. 21-60.
- 岡田禎之 2016b. 「拡張概念の定着化と項・付加詞の解釈分布について」『認知言語学論考』No. 13 : 107-137. 東京：ひつじ書房.
- 岡田禎之 (in press) 「身体部位名詞の語彙概念拡張と連語環境における意味分布の初期調査」『ことばのパースペクティブ』(中村芳久教授退職記念論文集) 東京：開拓社.
- Reinhart, Tanya and Eric Reuland. 1993. Reflexivity. *Linguistic Inquiry* 24: 657-720.
- Sweep, Josephine. 2009. Metonymy without a referential shift. In Bart Botma and Jaqueline van Kampen (eds.) *Linguistics in the Netherlands 2009*, 103-114. Amsterdam: John Benjamins.
- Waltereit, Richard. 1999. Grammatical constraints on metonymy. In Klaus-Uwe Panther and

Günter Radden (eds.) *Metonymy in language and thought*, 233-253. Amsterdam: John Benjamins.

[辞書類]

英次郎 on the web (2016 年 3 月時点) <http://eow.alc.co.jp/>

逆引英語名詞複合語辞典(1998) 東京：北星堂.

Oxford English dictionary ver. 4.0 on CD-ROM (2009) Oxford: Oxford University Press.

プログレッシブ英語逆引き辞典(1999) 東京：小学館.

新英和大辞典 第 6 版(デジタル版)(2002) 東京：研究社.

(文学研究科教授)

SUMMARY

Distributional Correlation of Nominal Conceptual Expansions in Predicational and Modificational Contexts

Sadayuki OKADA

This paper deals with the conceptual expansion of nominal expressions. It focuses on body-part terms that are known to show a wealth of extended meanings, and looks into two types of linguistic contexts of occurrence. In the predicational context of a clause, a comparison can be made between argument nominals and adjunct nominals. Arguments are selected by the predicate of a clause and they are the central participants, in contrast to adjuncts, which are in the periphery of the predicational context. In the modificational context of word combinations, a parallel comparison can be made between heads and modifiers. Heads are the main participants in word combinations, in contrast to modifiers, which work as restrictors of the head elements. In both contexts, there is a basic asymmetry between the central participants and peripheral participants, in that the former exhibit a wider variation of expanded references in comparison to the latter. This systematic difference suggests a plausible route of semantic permeation of nominal conceptual expansions from central to peripheral participants.